

<エッセイ>

医学図書館 1996:43(3):361-368.

染井霊園:医家の名墓を探る ②

さかき はじめ たぐちかずよし
榊 俣・田口和美

堀江 幸司

東京女子医科大学図書館

今回は、前回¹⁾の坪井信道・坪井信良・緒方正規に続いて、東京大学医学部にゆかりの榊俣(精神医学)、田口和美(解剖学)を取り上げる。冒頭に掲載した染井霊園の写真は、雪の日の早朝(写真1)と4月の桜の季節(写真2)に撮影したものである。

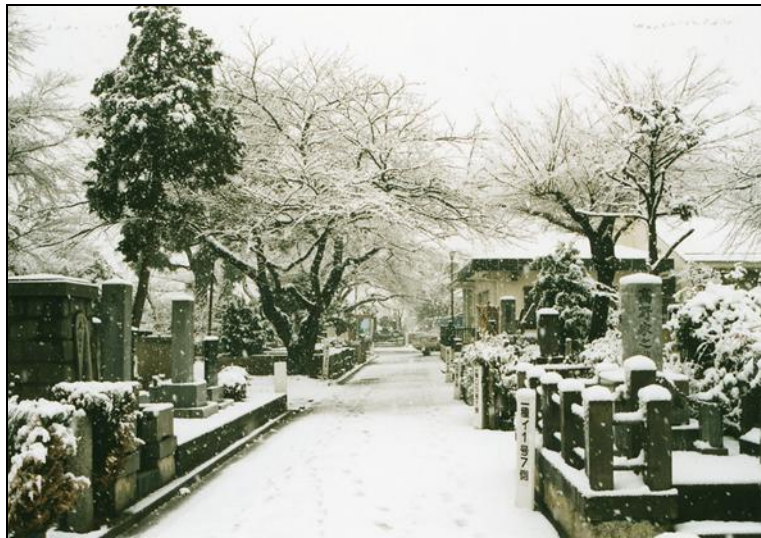


写真1. 雪の日の染井霊園 一右手奥に見えるのが霊園事務所



写真2. 染井霊園 一外人墓地付近



東京都染井霊園・医家墓所案内図[堀江幸司作成]

○ 榊 俣(1857-1897)

没年月日:明治30年(1897)2月6日(41歳)

墓石の位置:1種イ5号8側

正面:東京帝國医科大學教從五位醫學博士榊俣墓

側面:(右側面)高樹院頭光徳俣睿居士

: (左側面)明治三十年二月六日没

享年四十一

榊俣(写真3)の墓は、緒方正規の墓に隣接している。この榊家の墓所は、当初の調査対象にはなく、全く偶然の発見であった。緒方正規の墓の写真撮影の際、隣の墓所に入りカメラを構えていて見つけたのである。墓石との出会いには、何かに導かれるというか、不思議なものを感じることがある。榊俣の墓石の左隣に「榊俣之墓・妻幸之墓」、右隣に「榊家之墓」が置かれている。(写真4)「榊家之墓」には、弟の榊保三郎(九州帝国大学医科大學精神病学講座教授)が葬られている。榊俣の墓石は、刻まれた名前の一部が、損傷していた。墓石の上部

<エッセイ>

医学図書館 1996:43(3):361-368.

に東京帝国医科大学教授の文字が刻まれていなければ、この墓が、榊家の墓だとは気が付かなかったかも知れない。

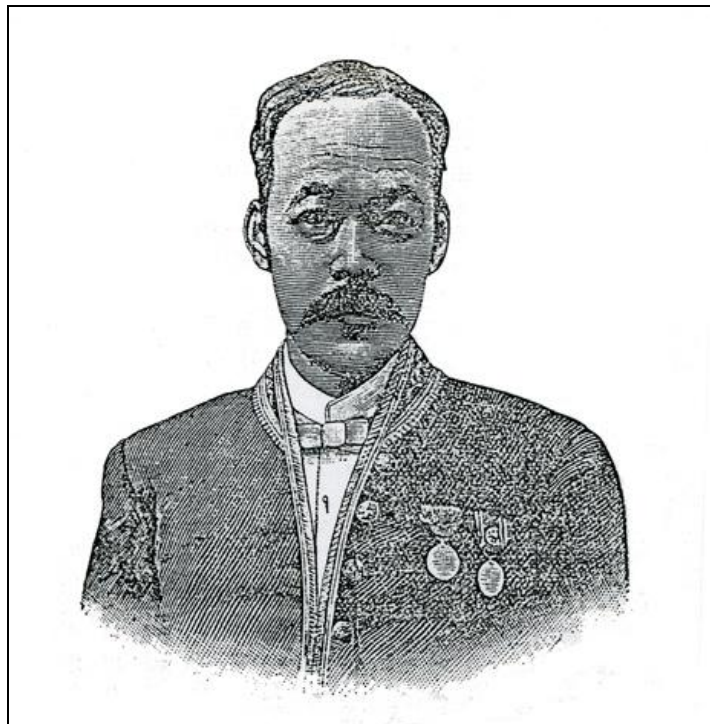


写真3. 榊 椒(1857-1897)



写真4. 榊家墓所 —中央が榊椒墓—

榊俣は、榊綽(ゆたか)(令輔)の長男として、安政4年(1857)8月28日、江戸下谷に生まれる。²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾ 父・榊綽は、開成所において蘭学の教師を務め、活版・銅版を初めてわが国に広めた人物である。

榊俣は、幼名を善太郎といい、のち俣と改めた。明治元年(1868)、両親について駿府に行き、静岡藩学に入った。沼津に移転後、沼津小学校に入り、卒業後、杉田玄瑞、石橋好一等の門で英語を学んだ。明治5年(1872)、東京に出て、下谷和泉橋畔の三崎嘯の塾に入って濁逸語学を講習した。同年10月に東京第一大学医学校医科予科生となって、明治7年(1874)に基本科に進み、明治13年(1880)3月18日、東京大学医学部を卒業。5月31日、東京大学医学部雇となった。明治14年(1881)7月12日、医学士の学位を受け、同月15日、東京大学準判任御用係に任じた。第一医院眼科担当医として眼科学を攻究し、井上達也(神田駿河台眼科医)の依頼によって診察したこともあったという。明治15年(1882)2月2日、ドイツに学び、ベルリン大学で精神病学を専攻した。ウィルヒョウ(Rudolf Ludwig Karl Virchow, 1821-1902)の病理学教室では、神経系統の病理解剖を研究した。当時のドイツへの留学生の中には、森林太郎(鷗外)、青山胤通、片山國嘉などがいた。森鷗外は『濁逸日記』の中で、榊俣について次のように書いている。

「・・・名を榊俣といふ。身の丈高く色白く、洋人に好かるる風采あり。故郷一婦あるをも顧みずして、巧に媚を少女に呈した。・・・」(『濁逸日記』明治十八年九月二十七日)⁸⁾

榊俣は、明治19年(1886)10月20日、帰朝後、帝国大学医科大学にはじめて精神病学講座を設け、11月11日、その教授となった。また、東京府巢鴨病院(はじめ東京府癪狂院のちの東京都立松沢病院)(小石川区巢鴨駕籠町・現在の文京区本駒込6丁目)を監督した。明治20年(1887)4月19日には、相馬疑獄事件において、相馬誠胤(ともたね)子爵の精神鑑定を主任医として行い、ベルツ(Erwin von Baelz, 1849-1913)(帝国大学医科大学教師)および佐々木政吉(帝国大学医科大学教授)が、この鑑定に同意している。⁹⁾

榊俣は、明治29年(1896)夏頃より咽喉の病気にかかり、金杉英五郎(東京慈恵会医科大学<旧制>初代学長、耳鼻咽喉科の草分け)らの治療を受けたが回復せず、第一医院へ入院。明治30年(1897)2月6日午後1時半、41歳の若さで逝去した。¹⁰⁾死の前日の午前9時、三浦守治病理学教授が病床を見舞う。このとき、榊俣は「我病屍にして多少医学に資することを得ば本望なり。吾が死したる後、願くは大学々生諸君の眼前にて、遠慮なく思ふ存分に解剖して呉よ」と遺言したという。¹¹⁾ 剖検は、三浦教授の執刀によって6日午後2時45分着手され、4時45分終結した。病理解剖診断は食道癌、顕微鏡診断は扁平上皮癌であった。葬儀は9日に行われた。¹⁾
²⁾ 葬列は1千人を超え、午後1時に駒込西片町(現在の文京区西片2丁目)の邸宅を出発。駒込通り(現在の本郷通り)に出て追分を左折し、駒込曙町(現在の文京区本駒込2丁目)より東京府巢鴨病院前を通り、染井墓地に向かった。濱田玄達(医科大学長)が弔辞を読み、呉秀三(精神病教室総代)、田口和美(東京医学会総代)が、これに続いた。¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾ 家族、親族、会葬者の焼香のあと墓地に葬られた。

翌明治31年(1898)、遺像の制作が計画され、12月5日午後3時より、その建像式が医科大学精神病学教室において挙行された。発起人の片山國嘉(有志者代表)の式辞に続き、菊池大

<エッセイ>

医学図書館 1996:43(3):361-368.

麓(東京帝国大学総長・理学博士)の告文朗読があった。その後、遺族を代表して榊保三郎の謝辞があり、小金井良精(よしきよ)の決算報告があったという。¹⁶⁾

告文を読んだ菊池大麓(1855-1917)は、箕作阮甫の孫で、箕作秋坪(1825-1886 蘭学者)は父にあたる。坪井正五郎に嫁いだ尚子とは兄妹である。^{注1)} 菊池大麓の墓は、「箕作秋坪先生之墓」と並んで谷中霊園の乙5号2側にある。

榊俣のあと、精神病学教室の教授となったのが、呉秀三で、三代目が三宅鑛一である。三宅鑛一(1876-1954)は、東京大学医学部の初代病理学教授を務めた三宅秀の長男である。三宅秀の伝記¹⁷⁾を調べていて気が付いたことがある。日本橋の老舗「榛原(はいばら)」(和紙・1806年創業)を継いでいる中村明男氏(取締役社長)が、三宅秀の曾孫にあたるということである。系図によると、中村氏の父方の祖母が、三宅秀の五女八重(中村直次郎室)である。三宅秀の妻は、佐藤尚中の娘であるので、中村氏の祖先は東京大学医学部と順天堂大学に関係していることになる。この中村氏と筆者は同窓で、高校生の時は、同じクラブ(男声合唱)に所属していた。

三宅鑛一は、三宅良斎(鑛一の祖父、1817-1868)、三宅秀とともに谷中霊園・天王寺墓地に眠っている。

榊俣と墓を並べている弟の榊保三郎は、濁逸協会学校より一高を経て、明治32年(1899)東京帝国大学医科大学を出た。卒業後、東京府巢鴨病院医員兼東京帝国大学医科大学助手を務めた。明治34年8月に『癡狂院に於ける精神病看護学』を著している。明治36年(1903)ドイツ、イギリス、アメリカ、フランスに渡り、精神医学を研究した。明治39年(1906)11月、帰朝後、京都帝国大学福岡医科大学(のちの九州帝国大学医科大学)教授となり、精神病学講座を担当。大正14年(1925)8月11日まで教室主任として多方面に活躍した。¹⁸⁾

榊保三郎と同時代の精神病学の大家に今村新吉(京都帝国大学京都医科大学初代精神医学講座教授)がいる。わが国の精神病理学の草分けで、父が、この染井霊園に墓のある今村有隣である。

○ 田口 和美(1839-1904)

没年月日:明治37年(1904)2月3日

墓石の位置:1種イ1号12側

正面:正四位勲二等医学博士田口和美墓

田口和美(写真5)の墓は、自然石で青みがかっている。(写真6)高さがあって厚みのある石である。解剖学者にふさわしく整然として個性的な墓である。葬られている田口和美の考え方が伝わってくるような墓である。墓所は、手入れが行き届いている。墓域は霊園事務所の裏手にあった。



写真5. 田口 和美(1839-1904)



写真6. 田口和美墓

田口和美は、天保10年(1839)10月15日、武蔵國北埼玉郡小野袋村藤島郷に生まれる。¹⁹⁾²⁰⁾²¹⁾²²⁾ 緒方洪庵が、大坂に適塾を開いた翌年のことである。父は順庵と称し、祖先より医を業とした。

田口和美は、幼名を成庵といい、字は行節。節堂、三松堂と号した。嘉永6年(1853)江戸に出て佐藤一斎らについて和漢学を修めた。安政4年(1857)1月、旧幕府医官林洞海の門に入り、オランダ医学および医術を修行し、万延元年(1860)に赤澤寛堂の門に入った。文久2年(1862)9月、下野國安蘇佐野小屋町に医業を開き、明治2年(1869)5月、再び江戸に出て、医学校兼病院(下谷和泉橋通旧藤堂藩邸)に入学。英医ウィリス(William Willis, 1837-1894)に英学および医術を学んだ。また、大学東校の教官司馬盈之、渡辺洪基らに英書で解剖学・化学・生理学を学び、蘭医ボードウィン(Anthonius F. Bauduin, 1822-1885)からは生理学を学んだ。明治3年(1870)1月24日、大学東校の小句読師となり、翌明治4年(1871)助教になった。ミュルレル(Benjamin Carl Leopold Mueller, 1824-1893)、ホフマン(Theodor Eduard Hoffmann, 1837-1878)について、濁逸医学を学んだのも、この時期のことである。明治5年(1872)1月11日、東校解剖学事務となった。明治8年(1875)2月、東京医学校に雇われて、解剖科専務になり、明治9年(1876)6月、初代の解剖学教授となった。

現在、谷中霊園・天王寺墓地に「千人塚」の墓石が三つある。これは、東京大学医学部で解剖された身元不明者や土葬で葬られた場所に建てられたものである。中央の墓石は、明治14年(1881)6月のもので、その左側面に、田口和美は、明治3年(1870)10月から明治13年(1880)9月までに解剖した数が1千名を超えたことを記している。この「千人塚」の題字は、池田謙斎(東京大学医学部総理)による。

田口和美は、明治20年(1887)5月になって欧州へ留学し、2年後の明治22年(1889)10月、帰朝している。解剖学会²³⁾を組織して、医科大学解剖学教室で会合したのは、明治26年(1893)7月20日のことである。田口和美が会頭となり、発起人には、小金井良精、新井春次郎が名を連ねた。これが、現在の日本解剖学会のはじまりである。来会者は、発起人のほか、中島一可(陸軍)、大田彌太郎(海軍)、加門桂太郎(京都医学校)、金子次郎(大阪医学校)、小山龍徳(長崎医学部)、田中正鐸(金沢医学部)、鈴木文太郎・竹崎季薫・大澤岳太郎(医科大学)の諸氏であった。会合では、解剖学の授業方法などについて協議し、その進歩を図るために解剖学会を設けて、毎年一回学会を開催することを決議している。また、田口和美は、この会合において「解剖学の由来及其医学の大本たること」と題して演説した。²⁴⁾「田口博士在職25年祝賀」が計画され、美術家によって肖像が制作されたのも、この明治26年(1893)のことであった。

昨平成7年(1995)9月15日から11月26日にかけて「日本解剖学会100周年記念 ‘95特別展(人体の世界)」が国立科学博物館(東京・上野)を会場として開催されたので、最終日に見学に行ってみた。博物館の周辺は、入場を待つ人々で長蛇の列であった。館内には人が溢れ、身動きもできない状態で、ゆっくりと展示品をみる余裕もなかったが、夏目漱石の脳の標本展示などが興味深かった。

田口和美が逝去したのは、坪井信良と同じ明治37年(1904)のことである。²⁶⁾²⁷⁾²⁸⁾ 1月3日頃から体調を崩し、いったんは軽快したが、27日に至って病床についた。2月2日、東京帝国大学医科大学附属病院に入院。入澤達吉教授(内科)、橋本節齋助教授(内科)などの治療を受けたが回復せず、3日午後6時逝去した。享年66歳。5日、遺骸は、医科大学病理学教室に送られ、山極勝三郎教授の執刀によって、病理解剖が行われた。午前9時半に着手され、11時半に終結した。傍観者は2百名を数え、その中には、後に同じ染井霊園に眠ることになる岡田和一郎教授(耳鼻咽喉科学)の姿もあった。肺水腫、心臓肥大、大動脈半月弁内幕炎、慢性腎間質炎が

認められ、病理診断には、「肺水腫と沈降性肺炎とは其重なるものにして死の由来する処は心臓麻痺にあり。而して慢性腎臓炎、大動脈半月弁の慢性炎の結果より肺水腫を起し遂に転帰して心臓麻痺を促し死に至りしものと診断す」²⁹⁾と記載された。

8日、本郷区弓町^{注2)}の邸宅には、正午頃から会葬者が引きも切らず、南隣の辻氏邸および美術学校が休憩所にあてられた。午後1時、出棺。棺は二箇中隊の儀仗兵に守られて染井墓地斎場へと向かう。葬列は一千五百名を超え、駒込通り(現在の本郷通り)の大学赤門前を通過して進んだ。その長さは数丁にわたったという。葬列の順序は、先駆、高張、生花、儀仗兵、導師、勲章、香爐、位牌、銘旗、棺、墓標、喪主、親戚、儀仗兵、大学教授助教授、医科大学学生、慈恵医院医学校生徒、会葬者の順であった。

午後2時染井斎場に到着。朝からの曇り空から細雨が降り出し、葬儀は、古式によって執行された。ベルツは、その日のことを9日の日記のなかで、「昨日、田口教授の葬儀に列した。寺院内にて半時間ほど葬列を待った。この中には余の多年相識の日本人が澤山あった」³⁰⁾と記している。

3月4日午後1時より、下谷池之端の無極亭において、田口和美の追悼会が、第13回医家先哲追薦会にあわせて施行された。³¹⁾生前、田口和美が、医家先哲追薦会の会頭を務めていたからである。式場床の間には、故田口会頭の真影が安置され、正面には遺墨二幅が掛けられた。はじめ、追薦会は、神田錦輝館で開催される予定であったが、軍国多事のため会場が変更になったという。参会者の中に、富士川游、三宅秀、石黒忠恵、尼子四郎、片山國嘉、呉秀三、三浦謹之助の名前がみえる。富士川游が、追悼演説をした。さらに、4月には、田口和美の銅像をつくって、東京帝国大学医科大学の構内に安置することが計画された。³²⁾³³⁾ 発起人の中に、緒方正規、岡田和一郎の名がある。この銅像は、海野美盛によって製作され、この除幕式が、五周忌にあたる明治41年(1908)2月3日に举行された。遺族である田口碩臣(たぐち・ひろとみ)のほか、濱田東京帝国大学総長、青山医科大学長など多数が参列した。³⁴⁾

田口家の墓所には田口碩臣(従四位勲四等医学博士)の墓もある。田口碩臣は、田口和美の子で、千葉医学専門学校で教鞭を執った。父と同じく解剖学を担当した。略歴は以下のとおりである。³⁵⁾

明治13年(1880) 3月 東京市本郷区弓町2-23に生まれる。

明治40年(1907)11月 千葉医学専門学校卒業

東京帝国大学医科大学助手 解剖学教室勤務

明治42年(1909) 9月 千葉医学専門学校解剖学授業を嘱託

明治45年(1912) 6月 千葉医学専門学校教授

大正 8年(1919) 8月 解剖学研究のため2年間、イギリス、フランス、ドイツ、オランダへ留学を命じられ、翌大正9年(1920) 2月出発

大正10年(1921)10月 帰朝

大正11年(1922) 3月 医学博士(東京帝国大学)

大正12年(1923) 4月 千葉医科大学教授兼千葉医科大学附属医学専門部教授

<エッセイ>

医学図書館 1996:43(3):361-368.

田口碩臣は、大正13年(1924)から肺尖カタルを患い、千葉県市川町真間の自邸で療養を続けたが、大正14年(1925)9月30日午後10時、逝去した。³⁶⁾³⁷⁾³⁸⁾ 享年45歳。10月4日に告別式が執行され、参拝者は、千葉医科大学職員・生徒のほか、小金井良精をはじめとする在京の解剖学者など数百人に達したという。

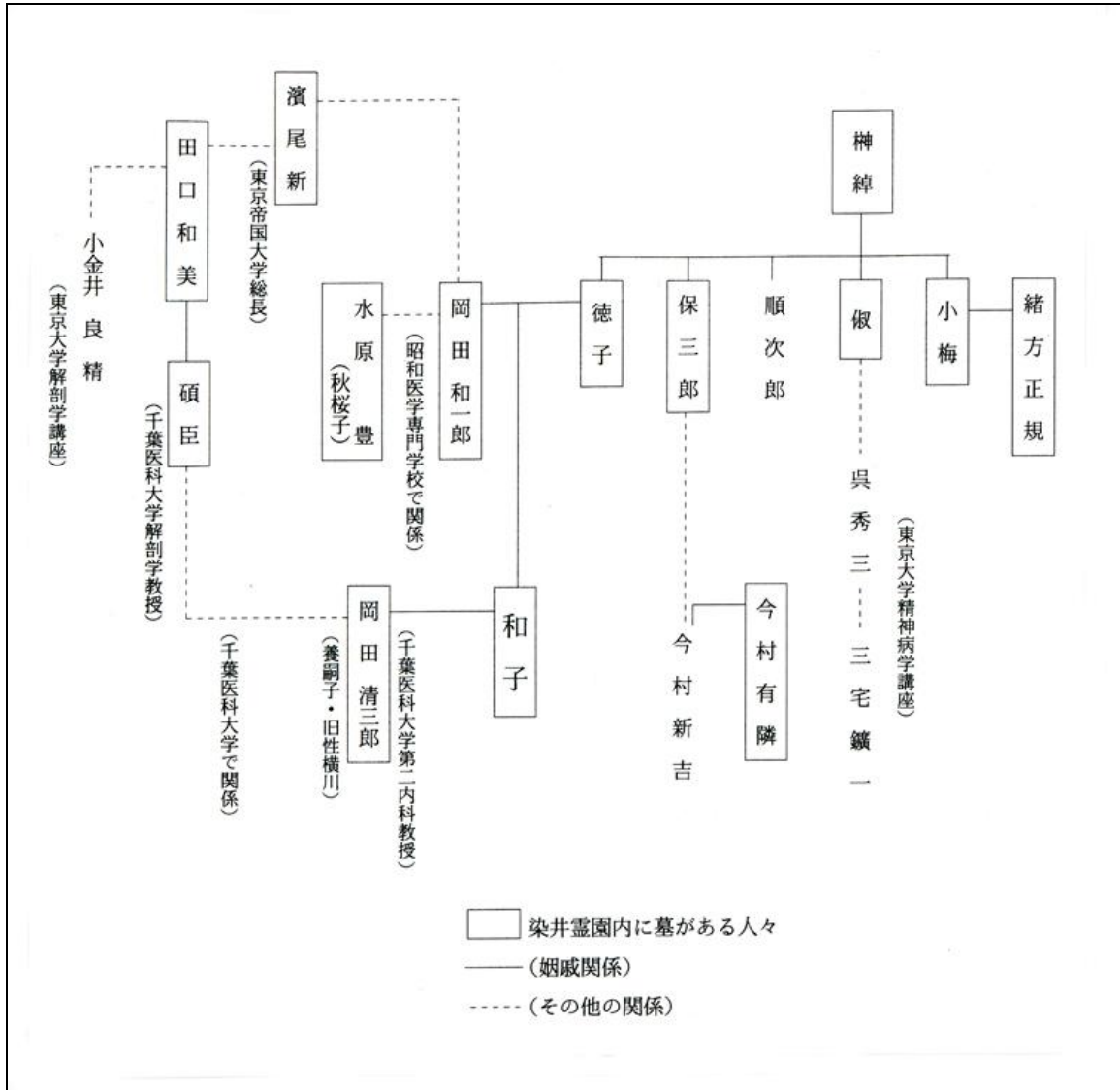
当時の千葉医科大学の第二内科教授が、愛知医科大学(現在の名古屋大学医学部)に転出する前の岡田清三郎(岡田和一郎の養嗣子)であった。岡田清三郎もこの染井霊園に眠っている。



次回は、岡田和一郎(東京帝国大学医学部教授・耳鼻咽喉科学)と水原豊(秋桜子)(昭和医学専門学校教授・産婦人科学・俳人)を取り上げる予定です。

注1) 前回の「染井霊園医家関係略図(1)」を参照。

注2) 本郷区弓町:昭和40年(1965)までの町名で、現在の文京区本郷1, 2丁目。江戸城の鬼門にあたるので、御弓組与力同心六組の組屋敷として、毎日的場で弓を射させたので、俗に御弓町と称した。現在、真砂坂上から大横丁に抜ける道沿いには、文京区保護樹木(昭和54年10月指定)のクスノキの大木があり、医学書院の洋書部も、この並びにある。建物と建物との境に残る赤煉瓦の塀が、昔の名残をとどめている。



染井霊園医家関係略図(2) [堀江幸司作成]

参 考 文 献

- 1)堀江幸司. 染井霊園:医家の名墓を探る① 坪井信道・坪井信良・緒方正規. 医学図書館 1995;42(3):338-46.
- 2)故医科大学教授医学博士榭俣先生之傳(呉秀三謹撰). 東京医学会雑誌 1897;11(5):220-30.
- 3)医学博士榭俣君略傳. 東京医事新誌 1897;985:326-8.
- 4)金子嗣郎. 日本の精神医学100年を築いた人々① 第1回 榭俣 臨床精神医学 1978;7(11):1297-304.
- 5)岡田靖雄. 榭俣:精神病学の礎石をおいた人. 松下正明. 続・精神医学を築いた人びと(上巻). 東京:ワールドプランニング, 1994. pp. 147-59.
- 6)故医学博士榭俣先生(肖像). 医事新聞 1909;791:口絵.
- 7)内村祐之. 榭俣先生と東京帝国大学医学部精神医学教室の創設. 精神神経学雑誌 1940;44.
- 8)濁逸日記. 「鷗外全集」第35巻収載. 東京:岩波書店, 1975. pp. 111-2.
- 9)故相馬誠胤子の病症を論ず. 国家医学 1892;1:3-30.
- 10)精神医学の泰斗榭博士矣. 東京医事新誌 1897;984:283-4.
- 11)三浦守治. 故医学博士榭俣君之病屍. 東京医学雑誌 1897;11(5):187-9.
- 12)榭博士の葬儀. 東京医事新誌. 1897;984:284.
- 13)故榭博士の祭文. 東京医事新誌 1897;984:284-5.
- 14)故榭博士の祭文. 東京医事新誌 1897;985:330-5.
- 15)故榭博士の祭文. 東京医事新誌 1897;986:480-1.
- 16)故医学博士榭俣氏建像式. 医談 1899;55:37.
- 17)福田雅代. 桔梗:三宅秀とその周辺. 神奈川:編者, 1985.
- 18)今井 環. 九州大学医学部五十年史. 福岡:九州大学医学部, 1953.
- 19)田口博士逝矣. 医談 1904;90:1-18.
- 20)小金井良精. 故田口博士逸事. 医談 1904;91:5-11.
- 21)高田耕安. 故田口博士ヲ悼ム. 医談 1904;91:11-4.
- 22)医学博士田口和美先生を敬弔す. 東京医学会雑誌 1904;18(14):643-66.
- 23)解剖学会. 東京医事新誌 1893;801:2032.
- 24)田口和美. 解剖学の由来及其医学の大本たること. 東京医事新誌 1893;801:2018-20.
- 25)田口博士在職廿五年祝賀. 医談 1893;3:13.
- 26)故田口博士葬儀概報. 東京医事新誌 1904;1345:331-3.
- 27)田口博士卒去余聞. 東京医事新誌 1904;1345:333-4.

<エッセイ>

医学図書館 1996:43(3):361-368.

- 28) 田口医学博士逝く. 中外医事新報 1904;574:283-5.
- 29) 故田口博士遺骸解剖記事大要. 東京医事新誌 1904;1345:334-6.
- 30) ベルツの日記. 東京:岩波書店, 1939.
- 31) 第13回医家先哲追薦会 故会頭田口博士追悼会. 医談 1904;91:1-14.
- 32) 広告. 医談 1904;96.
- 33) 故田口博士銅像建設計画. 東京医事新誌 1904;1346:418.
- 34) 故田口博士銅像除幕式. 医談 1908;106:16-9.
- 35) 田口教授卒去. 千葉医学会雑誌 1925;3(5):729.
- 36) 田口碩臣博士逝く. 医海時報 1925;1925;1627:2038.
- 37) 医学博士田口碩臣氏遠逝. 医事新聞 1925;1173:1216.
- 38) 田口碩臣氏. 東京医事新誌 1925;2441:2182.

(平成21年11月18日 個人リポジトリ登録)